

保育園での延長保育における自発的な歌に関する研究

—遊びと人との関わりを通して—

Study on spontaneous singing during extended childcare : Through play and interactions with others

山口 恵美子(東京福祉大学短期大学部)

Emiko Yamaguchi (Tokyo University School of Social Welfare Junior College)

(キーワード)

延長保育、自発的な歌、表現活動、遊び、人との関わり

1. はじめに

幼児期における教育は、生活を大切にすることが基本とされており、人格の基礎を養うとされる幼児期の音楽活動については、特に自分なりの仕方で表現しようとする意欲を養う事が重要であると考え

る。幼稚園教育要領や保育所保育指針においても、保育内容「表現」には「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」と示されている。

現代社会では、多様な文化的刺激、多様な音楽文化が取り入れられ発信されており様々な性質の異なる音楽に触れている。一方、子どもはその発達段階に応じて自然にリズム、音の高低、言葉をもって、自分の内側にある感情や思いを表出している。幼児における「豊かな表現」は、文化的成果を習得する基盤としての自らの素朴な表現の体験が重要であり、音楽以前の子どもの表現を大切にすることが必要である、との視点で子どもの生活の場を捉えた時、そのような事が可能な場として、幼稚園や保育所の延長保育、預かり保育が考えられる。

2. 研究目的

- (1) 保育園児の自発的な表現活動である歌と言葉の性質を分析し、幼児の自発的で自然な言葉の音楽的表現としての特性を明らかにする。
- (2) 自発的な歌発現の環境や状況を捉えて、遊びや人との関わり的重要性を明らかにする。

3. 研究方法

A 保育園の延長保育園児、3歳児15名を対象とし、筆者が週1回程度園児たちの遊んでいるときの声をICレコーダーに録音する。既成曲以外の自発的な歌の音楽的に表出した部分についてパソコンに取り出し、歌っている長さや時間帯、歌詞と思われる言葉などの音楽的要素を分析する。筆者および担当保育士が園児とかわる中で、自発的な歌が発現するまでの様子を筆者が観察し記録する。

4. 結果

(1) 音声データの収集

録音収集日数は開始日201X年10月10日～最終日である翌年6月27日の間の31日間で、録音収集数は合計99個であった。なお、成長過程によって発現回数に差が出てくるのかを調べるために、前期を10月10日から12月19日、中期を1月9日から3月27日、後期を4月11日から6月27日として、各期に

おける出生の早い園児A子から0男15名について自発的な歌の発現回数を月齢順に集計した(表1)。その結果、全体的な特徴的傾向はなく、発現回数の多かった4名についてみると、B子は、前・中期に比して後期の発現回数が多いが、D男とK男は前・後期が同じ頻度で発現しており、N子は前期が最も多く、中期・後期と発現回数が減っている。

表1 自発的な歌の発現回数

名前	A子	B子	C男	D男	E子	F男	G子	H男	I子	J子	K男	L男	M子	N子	O男	回数
前期	2	3	0	7	0	2	3	0	0	0	7	1	1	9	0	35
中期	1	1	0	1	1	2	2	3	0	2	2	1	2	6	0	24
後期	0	13	0	7	0	1	1	4	0	0	7	2	0	3	2	40
総合集計	3	17	0	15	1	5	6	7	0	2	16	4	3	18	2	99

(2) 音声分析結果

録音された自発的な歌らしき音声を99個採取した中で、調査期間全体で自発的な歌発現の回数が多かったB子、D男、K男、N子の4名(図1)の自発的な歌について、分析を行った。

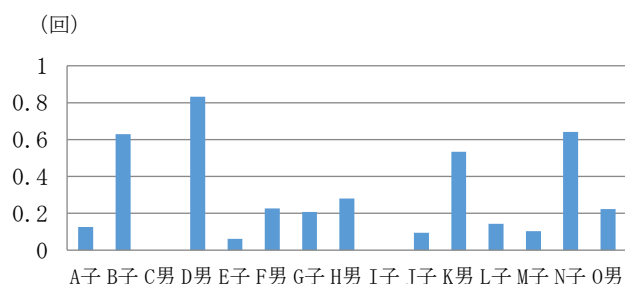


図1 発現の1日平均回数

(3) 自発的な歌発現の環境や状況

1) 自発的な歌の歌い始めまでの時間と歌の長さ

個人差はあるが、概して約1時間後に長い自発的な歌が多くなっている。このことから自発的な歌の出る心身の状態であることが伺える。

2) 発現状況と歌の内容

自発的な歌の発現状況には、気持ちの解放、気分の安定など、穏やかな自己表現可能な条件があることが認められた。

そして、自発的な歌の発現時間帯は、延長保育の後半に盛んになることが認められた。長い時間のものは、4名とも後半に集中している。このことは、戸外で活発に体を動かして遊んだ後室内に入り動から静

への切り替えになる事が自発的な歌の発現に関係していることが考えられる。そして、その時に生活や遊びの変化が自発的な歌を発現し易い環境であり、自分の気持ちを『歌う』ということが自然発生すると思われる。そのような動から静へのホッと安定できる環境を構築することが大切になるであろう。

さらに、自発的な歌は、自分自身への内面のストレス緩和になっているとも推測される。黙ったままではなく感情を歌にして表出することにより自身が現状を認め、納得するなど気持の安定が図られているのではないだろうか。このようなことに対し、大人はもっと目をつけ、意識して園児たちと関わっていく事が幼児を理解する上で重要となってくると考える。

5. まとめ

自発的な歌は、幼児にとってその時々や場面に応じて心地良く表現できる方法がとられており、その時々イメージに沿ったものであった。

用いられる言葉は、幼児の言葉自体への興味、心情体験の表現であった。言葉の内容には、言語的意味のある発声と意味の読み取れない発声とがあり、その時の気分の変化によって言葉の内容や長さが大きく変動すると思われる。単語としては意味を持つが、文として繋げると一貫性がなく意味が不明になるのは、園児がその瞬間の気持ちを表出し音として表現するだけのためであると考えられる。また、時として自身の自発的な歌を楽しむとともに他者が一緒になってリズムに合わせて身体表現をして共有することにより、より一層自発的な歌を表現する手段となっていると考えられる。